椎名誠さん、世界の不思議を語る

新潟・魚沼市立堀之内中学校で「オーサービジット」

㊨㊤生徒の近くで語りかける
㊨㊦世界の子どもたちを紹介
㊧椎名さんを囲んで記念の一枚

新潟県魚沼市立堀之内中学校（下村正人校長・生徒214人）で11月29日、作家の椎名誠さんが講演しました。本の作者（オーサー）が全国の学校を訪れる朝日新聞主催の人気企画「オーサービジット」のベルマーク版。2年生は国語の授業で椎名さんの著書「アイスプラネット」を学んでいます。

椎名さんは同書に登場するアナコンダを例に挙げてホワイトボードに蛇の絵を書き、「蛇の神経伝達スピードは1分間に約100m。尻尾を噛じられた場合、もし全長1kmだと気付いた時には大半が食べられてしまっています。そのため、アナコンダの成長は10m前後が限界」と説明しました。同様に、象の体積が倍になると足も8倍の太さでないと体重を支えきれないため「そんなに太い足で歩いたら、足がこんがらがっちゃうよね」。

「人間も大きくなるんですか？」と生徒が質問すると、「良い質問です。今も国ごとにだいぶ違って、例えばオランダ人は大きいので、トイレも大きいし格闘技も盛んです。ウエストのくびれが少なくてベルトが必要なので、ベルトで商売するならオランダがいいな」と笑いを誘いました。さらにアイルランドの風刺作家ジョナサン・スウィフトによる「ガリヴァー旅行記」やH.G.ウエルズの「透明人間」を挙げ、全ての生物には体型や大きさに「成長限界」がある事を説明しました。

◇

10分間の休憩を挟んだ第二部では、世界中で撮影した子どもの写真をスライドで映し、途中からは壇上を降りて生徒の間を縫って歩きながら説明しました。

インドのガンジス川で行われている「水葬」で遺体を対岸に運ぶ少女や、カナダのエスキモーやカンボジア、ラオスの少年など各地の生活や文化について紹介し、「本から色々な知識を得て、それを確かめたくて世界に行きました。クリエイティブな仕事がしたい人は、何かを見て刺激を受けたら自分で考える癖をつける事が大切」と語りかけました。

生徒会長を務める吉田悠人君（3年）は「世界の子どもたちを見て、自分が恵まれていると分かりました。明日からの学校生活に生かして、日々大切に生きていきたい」、代表で色紙を渡した渡辺圭さん（3年）は「アイスプラネットのほか、椎名先生の色々な本を読みとても面白かったです。初めて知った事や沢山の事を学べました。貴重な体験をさせて頂き有難うございました」とそれぞれ感想を述べました。

椎名さんは「ものを見て、心の中で考える事がいかに大切かを今日の収穫として得てもらえたら嬉しい。縁があったらまたどこかで会いましょう」と締めくくりました。

◇

堀之内中学校は、駒ケ岳と八海山が間近に見えるJR上越線の越後堀之内駅から車で10分ほどの場所にあります。1973年にベルマーク運動に参加し、累計220万点余りを集めました。担当の平片昭子先生は、「アイスプラネットの登場人物と椎名さんを重ねてみる生徒も多く、自分たちと違う体験をしてきた椎名さんの話を聞く事は子どもたちにとって大変有意義だったようです」と話しました。

学校への感謝の気持ち込めて

700万点　兵庫・伊丹市立南小学校

「こんなにマークを集めていたなんて驚きです」。10月にベルマーク集票累計700万点を達成した兵庫県伊丹市立南小学校（児童数1082人、峰松誠治校長）のPTA教養部ベルマーク担当リーダー久永敬子さんは、57年間の活動の重みを実感しています。

手元には、歴代のリーダーらがノウハウや工夫を書き記してきた分厚い引き継ぎのファイルが。これを参考にしながら、活動を進めてきました。

毎年5月、回収への協力を呼びかける手紙をベルマーク商品一覧表とともに全会員に配布します。各クラスにマークの収集箱が置いてあり、6月に回収。教養部のベルマーク担当者10人が学校に集まって企業別の仕分け作業をしたあと、分担して家に持ち帰り10枚ずつテープで貼って集計します。1カ月後、学校に持ち寄り、合算して財団へ送ります。2学期にも同様の作業を繰り返します。

市内屈指のマンモス校とあって、年間に集まるマークは6～8万点ほどになります。昨年度まではベルマーク担当の部員が5人で、作業量が多かったため、今年度から人数を倍に増やしました。1人当たりの負担はだいぶ軽減されました。

校舎の正面玄関には大きめの回収箱が置かれており、参観日や子どもの迎えなどで来校した保護者らがマークを持ち寄っています。時々、手紙も一緒に入っています。在校生の祖父母らしい「昭和30年卒業の者」と名乗る人からは、「微々たるものですが足しにして下さい」などとつづられた付箋とともに、何年もかかって集めたという牛乳石鹸のマークがたくさん寄せられました。700万点には、さまざまな人びとの思いが込められています。

「日頃お世話になっている学校への感謝の気持ちでベルマークを集める」というのが、南小PTAで長年受け継がれてきた考え方なのだそうです。久永さんは、「今年度ベルマークの担当になるまで、ベルマークの仕組みやマークでどういうものが買えるのかなど、詳しいことをほとんど理解していませんでした。仕分けや集計の苦労も初めて知りました。700万点達成をPTAや学校のみなさんに広くお知らせすることを通じて、ベルマークへの関心をもっと高め、学校を盛り上げていきたい」と話しています。

㊤話しながら仕分け作業をする教養部メンバー。情報交換の場にもなっています
㊧PTA教養部ベルマーク担当リーダーの久永敬子さん
㊨改修されたばかりの校舎。児童の増加で今年度は1クラス増え、36学級となりました